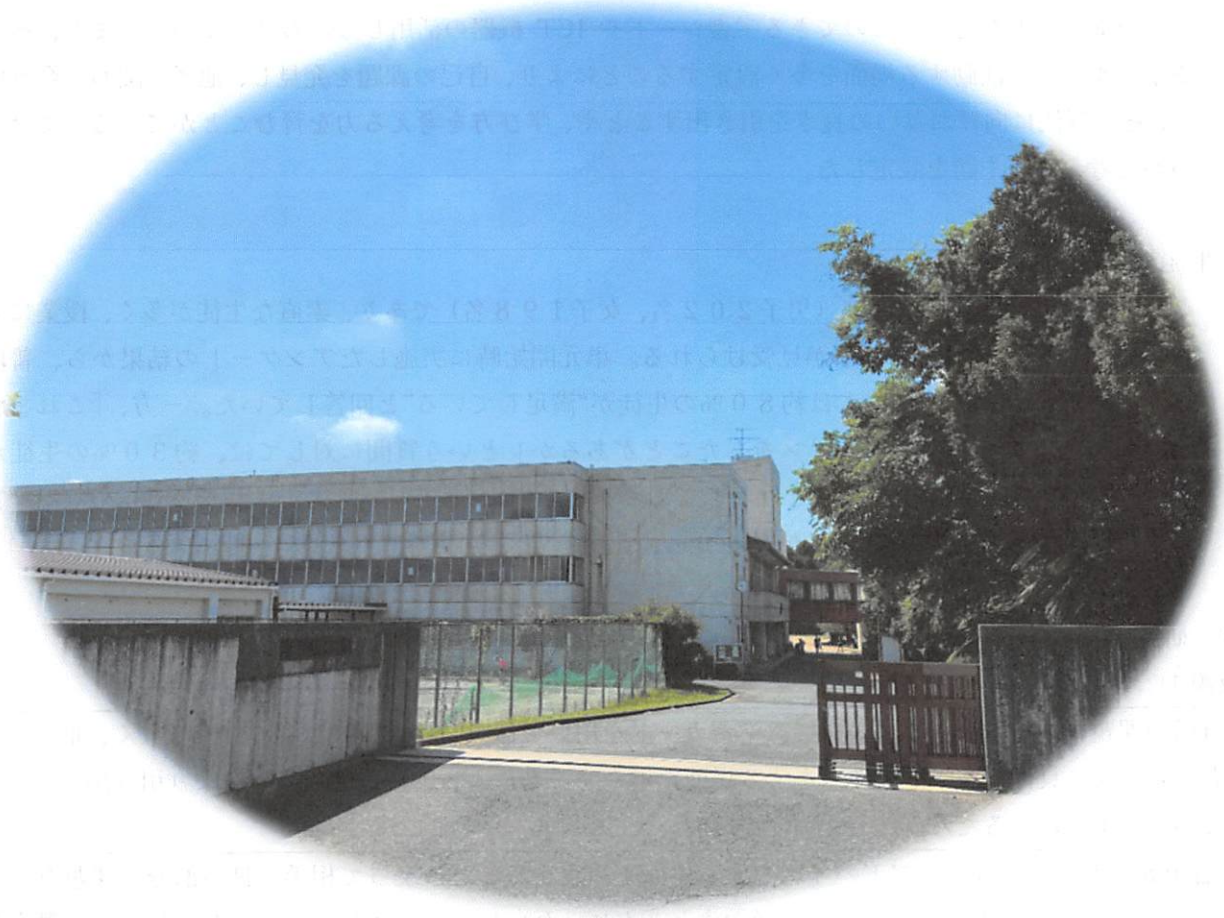
令和７年度　第７５次印旛地区教育研究集会

保健体育中学校　研究発表

【研究主題】

お互いの良さを認め合える学習活動を目指した授業への取り組み



佐倉市立西志津中学校

保健体育科

1　研究主題

「お互いの良さを認め合える学習活動を目指した授業への取り組み」

2　主題設定の理由

日々、目まぐるしく変化していく現代社会において、我々大人でもその変化に対応していくことは本当に難しく、それだけでも時間と労力が必要とされている。そして、時には不安を感じてしまう。そのような時代の中、コロナ渦を経験、乗り越えてきた子どもたちと接していると、「はたしてこれでよいのか」と、どこか自信が持てずに生活を送っている場面が、以前より多く見受けられる。また、グループなどで話し合い活動をさせる際、自分の考えを持ち、うまく他者へ伝えることを苦手とするような場面を多く感じる。

中学校学習指導要領（平成 29 年告示）解説保健体育科編において、「主体的・対話的で深い学び」の実現に向けた授業改善の推進が示されており、その中に、深い学びの鍵として「見方・考え方」を働かせることが大切で、「どのような視点で物事を捉え、どのような考え方で思考していくのか」が重要であると考える。

そこで本研究では、授業の展開場面において、自らが意欲的に取り組める学習過程の工夫と自らの学びを進め、振り返ることのできる学習シートや ICT 機器の活用しながら進めていく。また、ペアや小グループで活動する場面を多く設定することにより、自己の課題を発見し、他者と関わり合う中で、その解決に向けお互いの良さを引き出すことや、学び方を考える力を育むことができるのではないかと考え、本主題を設定した。

〈生徒の実態〉

本校は、全校生徒４００名（男子２０２名、女子１９８名）であり、素直な生徒が多く、授業にも意欲的に取り組んでいる様子が見受けられる。単元開始時に実施したアンケートの結果から、普段の体育授業の満足度については約８０％の生徒が“満足している”と回答していた。一方、「これまでの授業の中で、仲間にアドバイスをしたことがあるか」という質問に対しては、約３０％の生徒が“アドバイスをしたことがない”と回答しており、その中には“アドバイスをされたことがない”や“アドバイス通りに実行したことがない”といった生徒も多くみられる。

3　研究仮説

仮説①

自己の課題やその取り組みについて、学習カードを用いて個人だけで振り返るだけではなく、他者からのより具体的なアドバイスをする場面を増やすことによって、互いの良さをより引き出していけるようになるだろう。

各単元において、互いにアドバイスをする場面を設定することによって相手の良い部分や課題を見つけ、自分の言葉で他者に伝える機会を増やすとともに、互いにコミュニケーションをとりやすい環境をつくることで、意欲的に活動に取り組むことのできる環境づくりを目指す。

仮説②

ICT 機器等を活用し、自身を客観的にとらえる場面を設定し、自分の良さや改善点について言葉だけでなく視覚的に自らの動きをとらえることによって、新たな学び方や課題解決につながるだろう。

他者からのアドバイスに加えて、ICT 機器等を活用することで課題がより明確になり、課題解決に向けた具体的な活動を考え、実践する機会につなげていきたいと考えた。

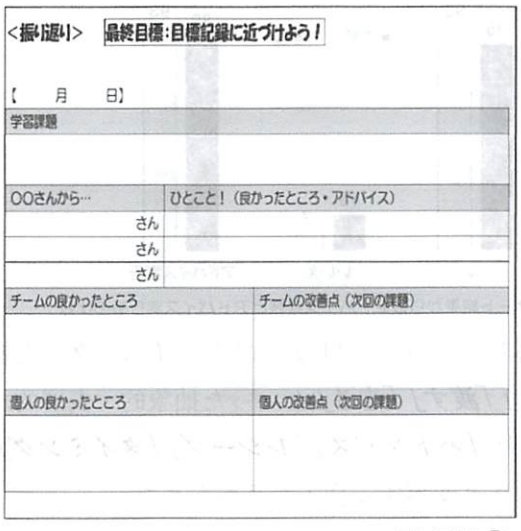
研究計画

時　　期	研　究　内　容
4月	研究の方向性についての検討　研究次第検討
5月	研究次第決定　研究計画立案
6月～7月	研究計画決定　研究仮説の検討
8月	研究仮説の決定　紙上提案
9月～3月	授業実践　実践データ等集約
4月～5月	授業実践の考察
6月～7月	研究のまとめ
8月	研究発表

4　具体的な取り組み

仮説①

・授業のなかで、教師が提示した学習課題や発問について個人やチームで思考したり、自分たちの課題を発見するために、グループワークの時間を設定した。その際、全学年で共通の学習カードを使用した（図1左）。学習カードには、自分自身の活動に対する振り返りに加え、他者からの評価やアドバイスを記入できるようにした。また、同じ学習カードを継続して使うこと、毎授業のめあてによって具体的なポイントを絞ったうえで記入をさせること等によって、互いの良さを見つけながら授業に取り組めるような環境を整えていった（図1右）。


<振り返り>　最終目標：目標記録に近づけよう！

【　月　日】

学習課題	
OOさんから…	ひとこと！（良かったところ・アドバイス）
さん	
さん	
さん	
チームの良かったところ	チームの改善点（次回の課題）
個人の良かったところ	個人の改善点（次回の課題）

図.仮説①における具体的な取り組み

（左：授業で使用した学習カード　右：グループワークの様子）

仮説②

・タブレットを使って動画撮影を行い、自分の姿を客観的に捉えながら動きや戦術の修正・改善ができるようした。その際、できていないことや修正点の発見のみに重点を置くのではなく、できていることやポジティブな声かけ等の肯定的なフィードバックを多く行うようにさせた。

・また、生成 AI を活用することで、新たに得た知識と既知の結びつけを手助けし、自ら考え、課題解決の場面を増やすことが期待されると思い、授業のなかで自身が発見した課題や他者との活動の中で見出した課題について、生成 AI を活用しながら改善案を見つけていく場面を設けた（図）。

図.仮説②における具体的な取り組みの様子

5　研究のまとめ

【結果】

・各単元の開始時にアンケートを実施し、これまでの体育授業の中で他者へのアドバイス経験の有無について集計したところ、単元開始時点では「はい」と回答した生徒は全体の 69%、「いいえ」と回答した生徒は全体の 31%であった（図１）。そして、各単元終了時に同アンケートを実施した結果、「はい」と回答した生徒は全体の 84%、「いいえ」と答える生徒は全体の 16%となり、アドバイスをした生徒は増加、アドバイスをしなかった生徒は減少を示した。

・また、アドバイスを受けたと答えた生徒の 90%以上の生徒が、仲間からのアドバイスを実行したと回答した（図２）。

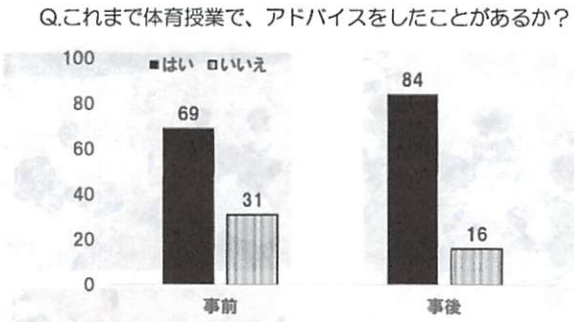


図1 アンケート結果からアドバイス経験の比較

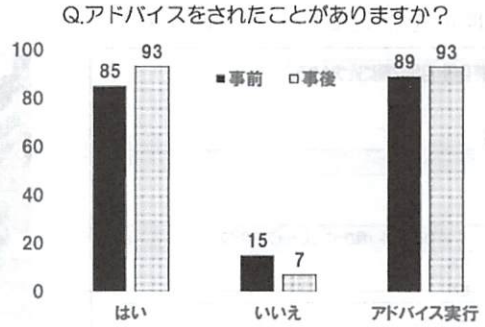


図2. アンケート結果から被アドバイス経験とアドバイス実行率の比較

・授業の中で行ったアドバイスの内容について記述式で回答したものを、AI テキストマイニングした結果を以下に示す（図３）。単元開始前の段階では、*「教える」「渡す」「走る」*といった抽象的・表層的なアドバイスをしていたことがうかがえるが、単元終了後には*「バトンパス」「レシーブ」「タイミング」*等アドバイスの内容もより具体性を帯びた、専門的なものへと変容する様子がうかがえた。

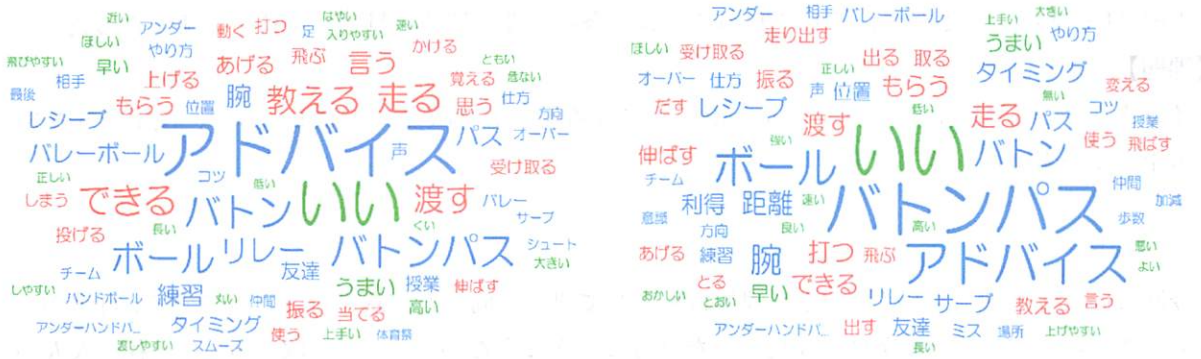


図3.「これまでしたアドバイスの具体的な内容」におけるテキストマイニング結果
（左：事前、右：事後）

・互いにアドバイスしあって協力しながら活動することで、仲間の良さを引き出したり、楽しく活動したりすることができるようになったという、生徒からの感想も得られた。

【考察】

仲間にアドバイスをする機会を設けたことで、技能のポイントを理解し、意識しながら活動に取り組んだり、自分の考えをまとめて伝えたりする場面が多く見られるようになった。また、仲間のアドバイスを実行してできるようになったときに、仲間から「いい感じ」「できたね」などプラスの声掛けが増えたことにより、自信を持って活動に取り組んだり、自分自身も仲間にアドバイスをしたりと、互いに高め合いながら活動に取り組む様子がみられた。

6　成果と課題

仮説①

自己の課題やその取り組みについて、学習カードを用いて生徒個人だけで振り返るだけではなく他者からのより具体的なアドバイスをする場面を増やすことによって、互いの良さをより引き出していけるようになるだろう。

【成果】

・活動の中で仲間に対して動きの修正を促す声かけや、仲間の活躍を肯定的に評価するといった声かけが増えた。

・互いにアドバイスをしあうことで、仲間と協力することの大切さを感じる生徒が増えた。

【課題】

・学習カードの記入に時間がかかるため、活動時間を確保するための工夫が必要である。

仮説②

ICT 機器等を活用し、自身を客観的にとらえる場面を設定し、自分の良さや改善点について言葉だけでなく視覚的にとらえることによって、新たな学び方や課題解決につながるだろう。

【成果】

・自身の動きを視覚的にとらえることで、課題がより明確になり、仲間からのアドバイスも受け入れやすくなった。

・生成 AI を活用することで、それぞれのチームに合った課題解決の見通しを持ちやすくなった。

【課題】

・インターネット環境によりタブレットが使用できる場所が制限されてしまうので、使用できない場合の手立てを考える必要がある。

7　おわりに

今回このような機会をいただき、保健体育科として研究に向けた実践を行うだけでなく、日常からできる取り組みの中で、新たな発見や成長につなげることができないかと考え、取り組んだ。我々大人からの声掛けや働きかけの工夫や生徒間での話し合いの充実から、技能の向上につなげることができているかについては、別の方法で検証していく必要がある。しかし、授業の満足度については、アンケートを取るたびに数字が上昇していることから、運動することについて前向きな生徒を増やすことができたのではないかと思う。引き続き、本校体育科で力を合わせながらさらなる教材研究に努め、実践につなげていきたい。